注目すべき感染症

◆腸管出血性大腸菌感染症

2006年の腸管出血性大腸菌感染症の報告数は第15週（27例）から増加が認められ、第20週（59例）に50例を超え、21～25週は80例前後で推移した。第26週（137例）に100例を超え、第27～29週は130例台で推移し、第30週（237例）はさらに増加して200例を超えたが、第31週は171例と減少し、第32週は140例である。本年第32週までの累積報告数は1,867例であるが、今までのところ例年（2000年1,739例、2001年2,779例、2002年1,942例、2003年1,282例、2004年1,976例、2005年1,846例）と比べ、特に多いとは言えない（**図1**）。

第32週に診断された140例についてみると、報告の多かった都道府県は大阪府（11例）、熊本県（11例）、愛知県（10例）、石川県（9例）、宮崎県（8例）であった（**図2a**）。そのうち熊本県の11例は保育園における集団発生であり、他に宮崎県、佐賀県においても保育施設に関連する集団発生が認められている。また、石川県の8例は飲食店に関連した集団発生である。2006年4月から、国内を感染地域とする場合に、県名などの詳細情報を届け出るようになったが、第32週に感染地域として多かった都道府県は、報告の都道府県とほぼ同様で、大阪府（11例）、熊本県（11例）、石川県（9例）、愛知県（9例）、宮崎県（8例）であった（**図2b**）。性別では男性73例、女性67例であり、年齢階級別（10歳毎）では0～9歳（54例）が最も多く、39%を占めた。また、有症状者は87例で、無症状病原体保有者が53例であった。無症状病原体保有者は、食品産業従事者の定期検便によって発見される場合もあるが、多くは探知された患者と食事を共にした者や、接触者の調査などによって発見される場合が多い。分離された菌の血清型・毒素型別では、O157 VT1・VT2（46例）、O157 VT2（41例）、O26 VT1（31例）の順に多かった。

第1～32週の累積報告数1,867例についてみると、報告の多かった都道府県は、大阪府（167例）、東京都（143例）、愛知県（110例）、福岡県（103例）、群馬県（100例）である（**図3**）。性別では男性895例、女性972例であり、年齢階級別（10歳毎）では0～9歳（751例）が最も多く、40%を占めている。性別・年齢群別にみると、0～9歳及び10～19歳では男性が女性より多く、それ以上の年齢群では女性が男性より多い。また、有症状者は1,235例（66%）で、無症状病原体保有者は632例である。性別・年齢群別に症状の有無をみると、男女ともに、30～50代では無症状病原体保有者が多く、それ以外では有症状者が多い（**図4**）。分離された菌の血清型・毒素型では、O157 VT1・VT2（786例）、O157 VT2（398例）、O26 VT1（386例）の順に多かった。

溶血性尿毒症症候群（HUS）は報告遅れ分や追加報告を含み、第32週に5例の報告があり、累積では50例となった。2006年4月から、HUS発症例の届出は、病原体の分離ができない症例であっても、便から直接のベロ毒素の検出や、血清抗体の検出によって届出対象となった。50例のうち、便から直接のベロ毒素の検出によるものが1例、血清抗体の検出によるものが11例届けられた。死亡については、第32週までに3例の報告があった。しかし、HUSなどの合併症や死亡については、届け出時点以降での発生が十分反映されていない可能性があり、発生があった場合の追加・修正報告をお願いしている。

2006年も保育施設での集団発生が散見されている他、飲食店や展示動物に関連した集団発生もみられている。本症は、今後も発生の多い状況が続くと予想され、その発生動向には注意が必要である。食品の取り扱いには十分注意して食中毒の予防を徹底するとともに、手洗いの励行などにより、ヒトからヒトへの二次感染を予防することが大切である。また保育施設においては、特にオムツ交換時の手洗い、園児に対する食前の手洗い指導を徹底し、簡易プールなどの衛生管理にも注意を払う必要がある。

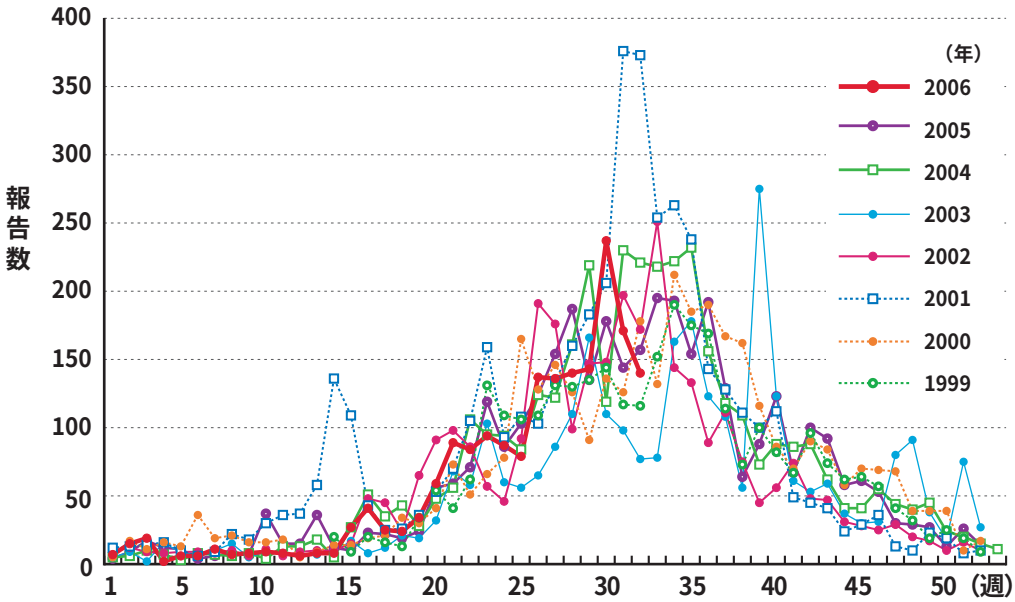


図1. 腸管出血性大腸菌感染症（無症状病原体保有者含む）の年別・週別発生状況

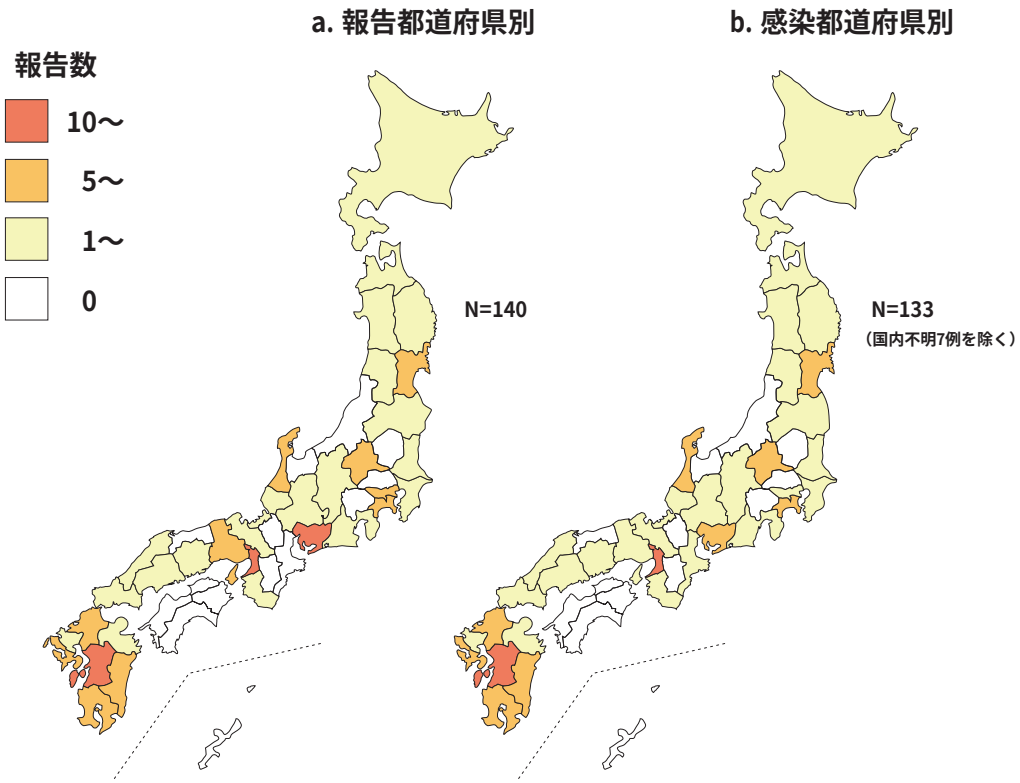


図2. 腸管出血性大腸菌感染症の都道府県別報告・感染状況（2006年第32週）

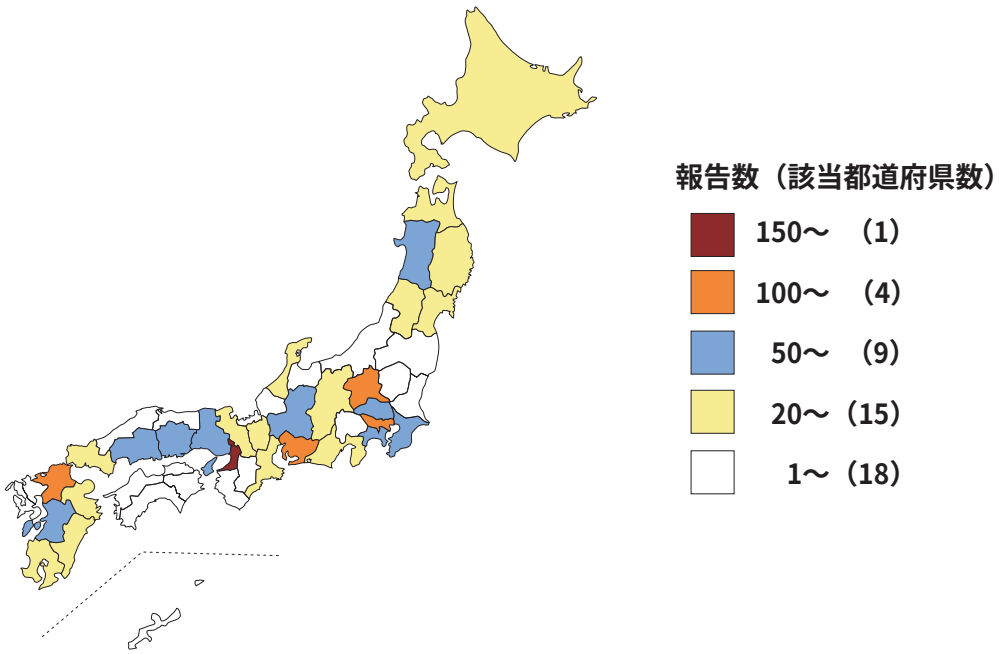


図3. 腸管出血性大腸菌感染症の都道府県別報告状況（2006年第1～32週）

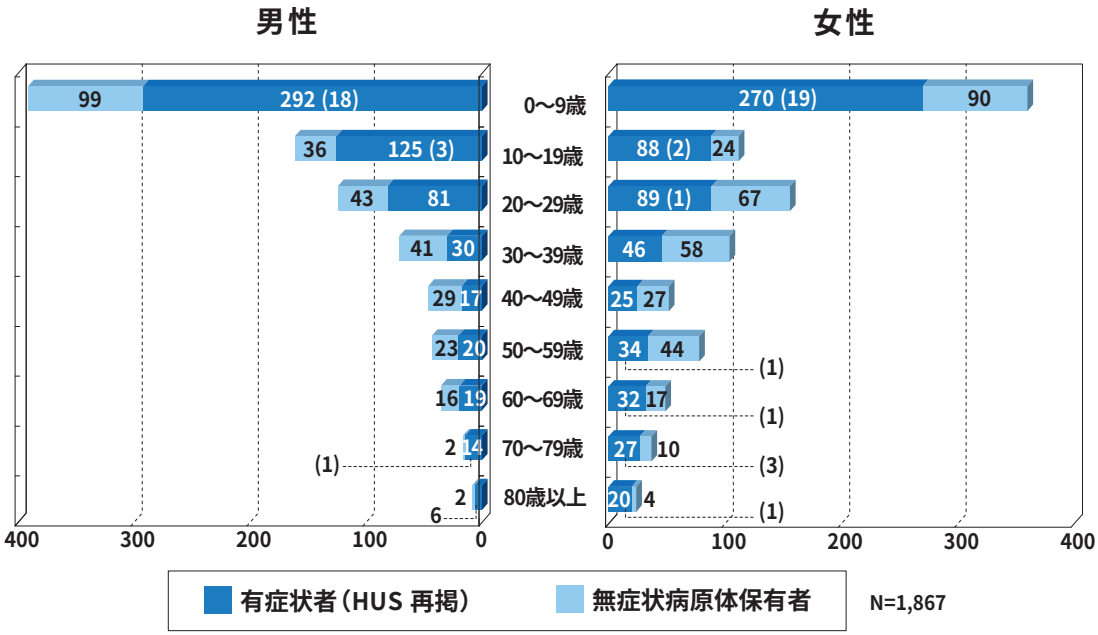
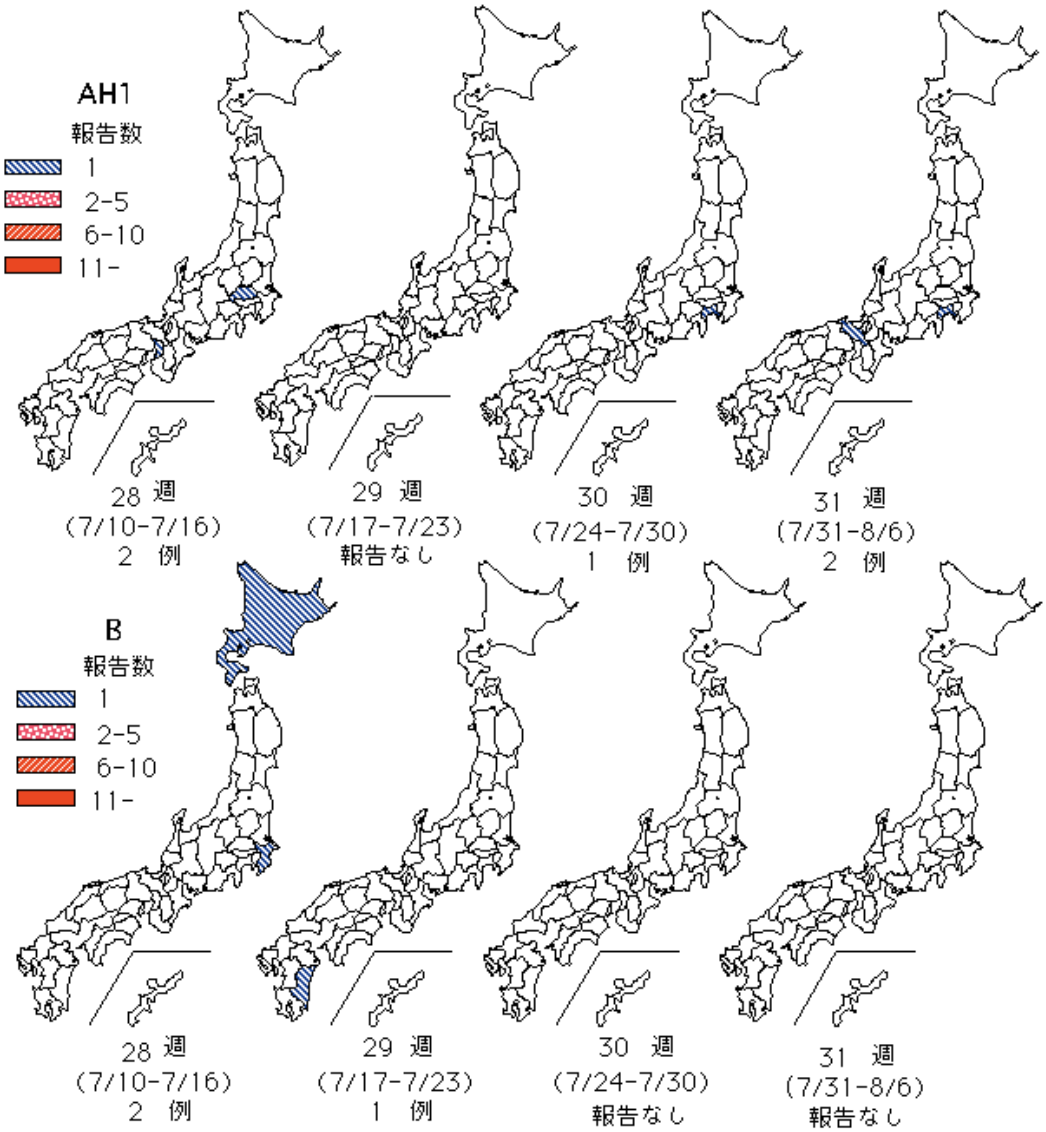


図4. 腸管出血性大腸菌感染症の性別・年齢群別・症状の有無別報告数（2006年第1～32週）

都道府県別インフルエンザウイルス分離・検出報告状況、2005/06シーズン第28週～第31週

（病原微生物検出情報：2006年8月17日現在報告数）

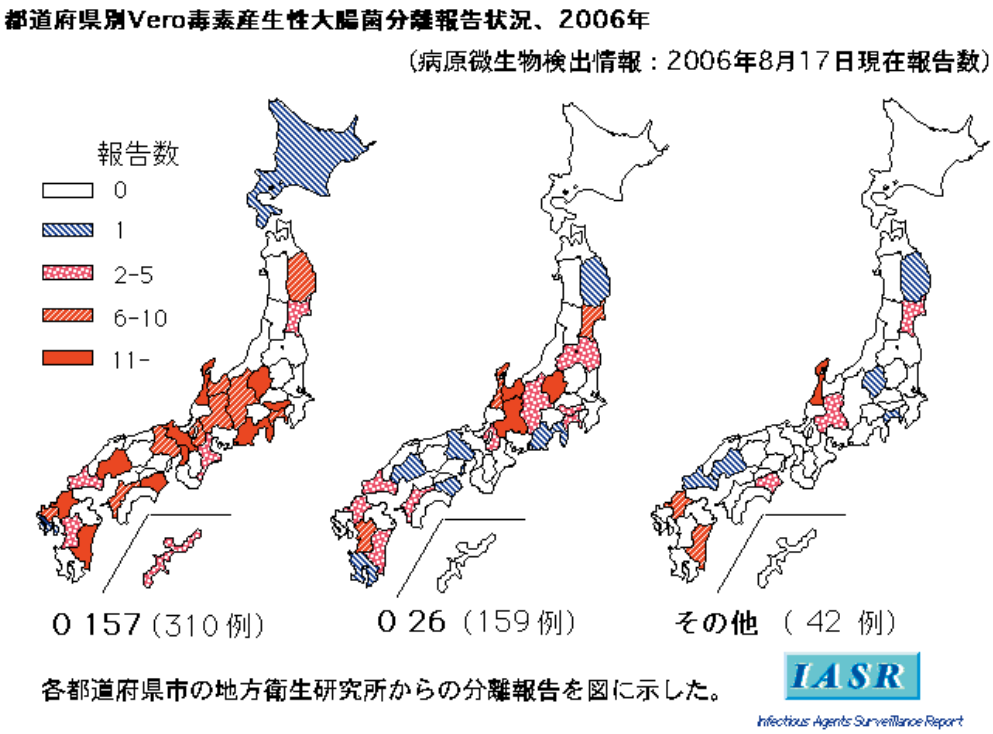


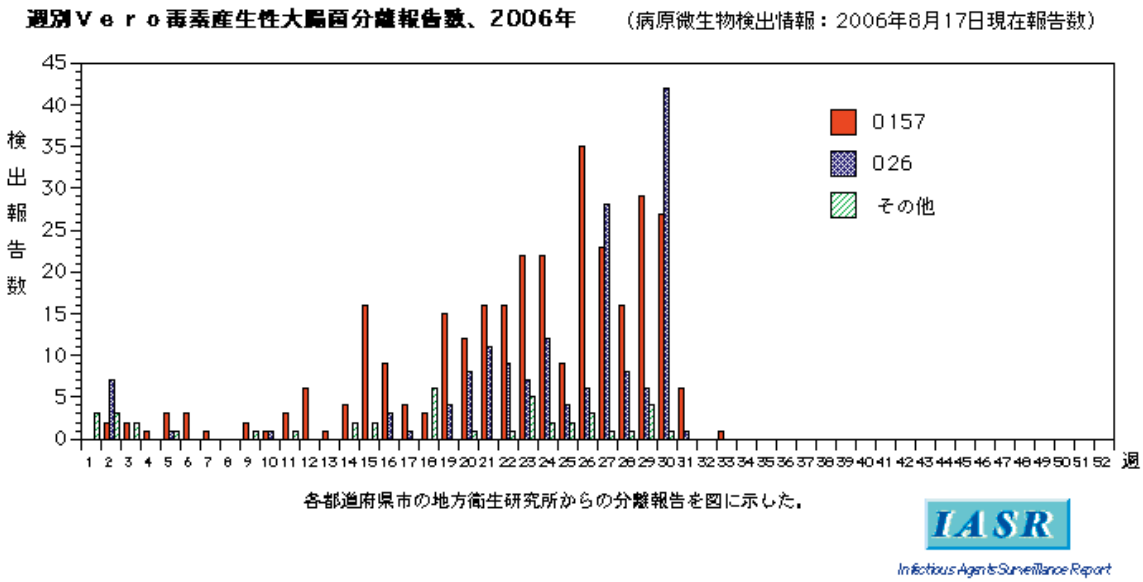
各都道府県市の地方衛生研究所からの分離／検出報告を図に示した。

IASR
Infectious Agents Surveillance Report

◆ヒトから検出されているVero毒素産生性大腸菌　2006年

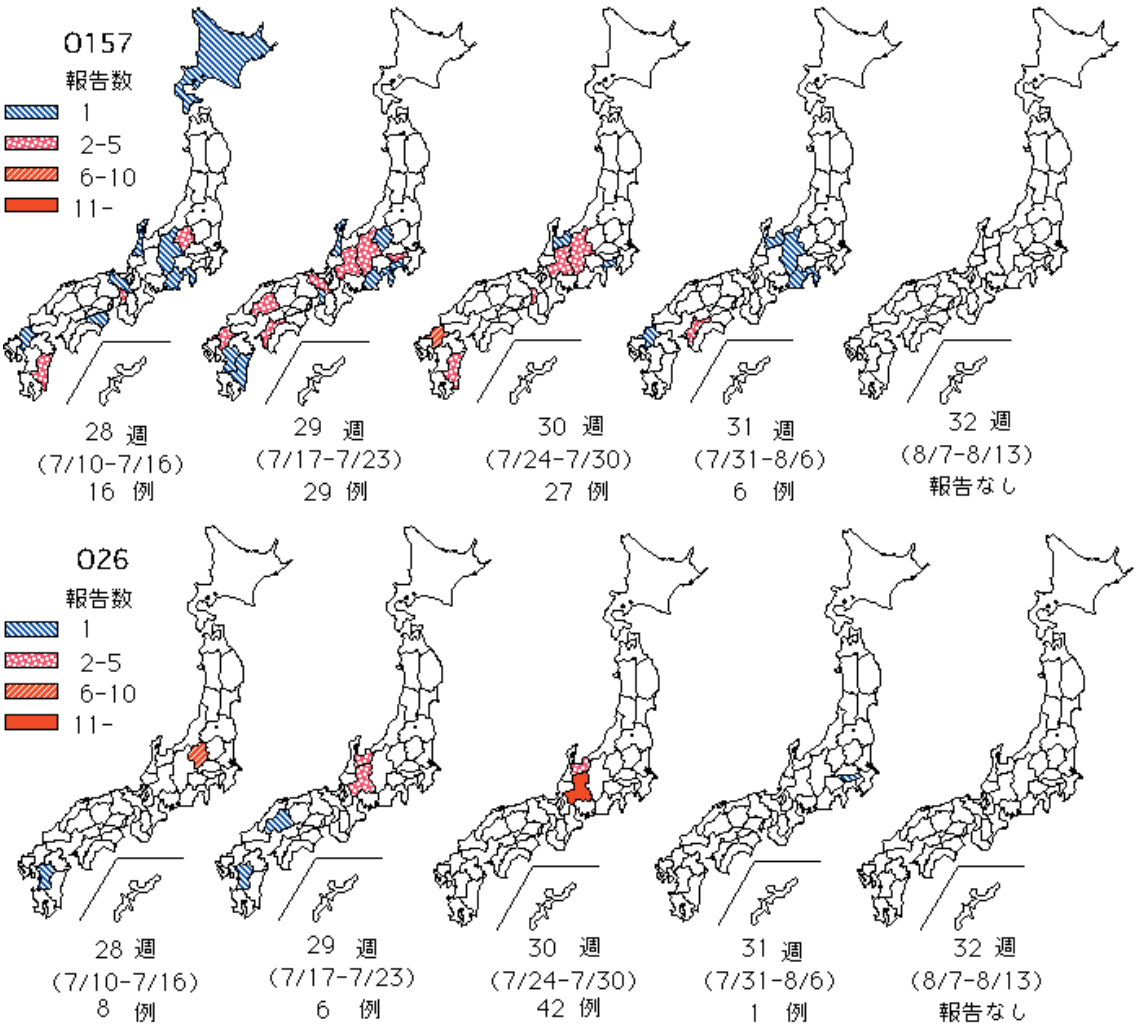
2006年の検出総数は511件で、O157が310件、O26が159件、その他の血清型が42件報告されている。第29週以降では、第30週に岐阜県からO26による保育所での集団発生事例が報告されている。





都道府県別Vero毒素産生性大腸菌分離報告状況、2006年第28週～第32週

（病原微生物検出情報：2006年8月17日現在報告数）



各都道府県市の地方衛生研究所からの分離／検出報告を図に示した。

IASR
Infectious Agents Surveillance Report